



「避けられればそれにこしたことはない」インド系と黒人系の間の交婚について：ガイアナの事例を中心としたスケッチ

柴田, 佳子
長嶋, 佳子

(Citation)

アジア系ラテンアメリカ人の民族性と国民統合 : 民族集団間の協調と相克に関する研究 (中間報告) 前山, 隆 編:65-77

(Issue Date)

1993-03

(Resource Type)

book part

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90001738>



アジア系ラテンアメリカ人の 民族性と国民統合

民族集団間の協調と相克に関する研究

(中間報告)

前 山 隆・編

静岡大学人文学部文化人類学教室

1993年

「避けられればそれにこしたことはない」 インド系と黒人系の間の交婚について： ガイアナの事例を中心としたスケッチ

柴田〔長嶋〕佳子

1. 調査の目的

本調査では、トリニダード・トバゴ、ガイアナ、スリナムにおけるインド系とアフリカ黒人系との間の男女関係および結婚について焦点を当て、主にインド系の方からの視点を重視する調査を行った²¹。いくつかの理由からガイアナをフィールドワークの中心に選び、当地では1992年8月初旬から10週間にわたり滞在した。

これら3ヶ国に共通する一つの大きな特徴は、インド系と黒人系が各国内の最大勢力であり、人口比率も近似しており、またその政治的、社会・経済的、文化的勢力関係でほぼ拮抗していることである。しかも両者は国内で最も劇的で、かつ対立や葛藤も多く含む問題のある関係をもちつつも、日常的にはそれらを極力回避したり、最小限に抑制したりする知識や技術を生みだし、身につけてきた。いくつかの歴史上に残る抗争はありながらも、表面上は平穏に共存してきたといえる。

一般にカリブ海地域は、異人種・民族間結婚や混血に寛容で、それらがかなり進んでいることで知られている。ところがこの二人種間の交婚に関しては、一種の拒絶反応が強く見られるのである。一般的なイメージとして定着してきた両者の根深い対立関係があるなかで、敢えて結婚に踏み切るカップルは多くなかったようだ。これらがよく見られるようになったのは、トリニダードやガイアナにおいてはここ20-30年のこと、と言う人が多い。スリナムではもっと最近のことである。このトピックに注目したこれまでの調査研究がなく、今のところ文献で確認するのがほとんど不可能なため、主にインタビューからの判断だが、それ以前の例は現在ほど社会的に目立ちうる現象ではなかったようである。日常会話を含むごく一般の社会生活においては両者が難なく関係をもつことができても、またきれいごとを述べたてても、保守性の最後の牙城としての結婚に関しては、嫌悪感を隠しきれない人（特にインド系）が驚くほど存在するのも、また事実なのである。

要するに、異人種・民族間結婚や混血の中では、インド系と黒人系の場合が最も障害ないし困難が多い、ということである。またたとえそれらを乗り越えて結婚しても、途中でその関係を解消したり（遺棄、別居、離婚など）、あるいはこの結婚に固有の問題（駆け落ち、通い婚、同棲／事実婚を含む）を少なからず抱えている場合もある。形式上は結婚していても、内実は破滅的だったり（不倫を含む）、不成功ないし失敗と判定できるものさえあつたりする。そしてその問題や失敗の最大の理由が、この種の交婚に敢えて踏み込んだから、というやや意地悪い評定が下されることは少なくない。つまり個人的な問題で結婚生活における様々な障害が生じて、両人種間の固有の葛藤に根源的な原因がある、とされたりするのである。

それにもかかわらず、あるいはそのような一般論とは関係なく、現実には結婚する例も少なからず見受けられる。ではどのような人々がこの種の交婚をし、またどのようなかたちないしパターンが見られるの

だろうか。いかなる問題や困難があり、いかに対処してきたのか。配偶者候補との出会い、配偶者の選択基準、宗教や政治との絡み合い、結婚までのプロセス、結婚の儀礼の選択とその内容、結婚後の親族・姻族との関係、居住地での隣人関係、子供の問題、相互の人種・民族的偏見の変化の有無やその度合、そしてこの国での人種・民族的関係への示唆、ナショナル・アイデンティティについてなど、様々な疑問が筆者にはあり、それらについて何らかの示唆を得られるような調査を心がけた。

2. 調査国の選定

これら3ヶ国のなかでガイアナを選んだ最大の理由は、このテーマを扱った調査研究がこれまでの文献研究、及び筆者のフィールドワークの中でも取り上げられていなかったこと、そして実はトリニダードでこの種の調査が地元の大学の研究者グループによってごく最近なされ、近々その結果が公表される予定だ、と91年の予備調査でわかったこと（92年訪問時には未公表）、しかしガイアナでは「重要だと認識しているが、これまでのところ皆無」と聞いたことである。これまでに多くの分野で両社会は比較されてきた。このテーマでも今後比較研究が可能になるには、ガイアナを選ぶことがベストだと思われた。スリナムでは交婚率はさほど高いとは言えず、現在このテーマで中心的に扱う場所としては不適切であると判断した²。

トリニダードにはカリブ海地域英語圏のエリート大学である西インド大学のセント・オーガスティン校（University of the West Indies, St. Augustine）がある。同国内のインド系住民の多さ（全人口121万人中37%、黒人系は42%、混血／ムラト16.3%、中国系3.1%、白人1.9% 89年推計）と近年見られる彼らの教育への熱意、勤勉さといった要因も重なり、大学のインド系学生および研究者の数も多い。インド系社会・文化について、そして黒人系との関係についての研究は比較的進んでいる方である。そうは言っても、交婚についてはほとんど調査らしいことはなされてこなかった。その点、ガイアナは重要な社会でありながら研究者もより少なく、大学などの高等教育、研究施設、予算などほとんどあらゆる面で「遅れている」状況があった。

ところでガイアナではこの間、10月5日に1968年以來の「自由で公平な」総選挙が実施された³。その公示のあった8月29日より、大多数の国民は選挙当日まで、人種や民族について日増しに敏感になっていった。これに対する人々の言及は、意識や感覚のなかではさほどではなくとも、政治的含意をもって積み重ねられるようにもなった。この点筆者はごく普通の日常生活と、この歴史的に重要な選挙を迎えての一種特殊な状況両方を経験したことになる。

調査には調査期限の問題もあることから、多様な形式のインタビューを中心に生の情報を収集した。本報告では、異人種・民族間結婚とナショナル・アイデンティティとの接点、インタビューにおけるいくつかの示唆すべき点、3ヶ国における両人種間の結婚についての概略、主にガイアナにおける両人種間の関係の概要、そして交婚そのものを扱う前に、本稿ではまずそれに否定的な理由について、特にステレオタイプのイメージの存在とその重要性に触れつつ、両人種双方の見解の代表的なものを簡単に述べて、人々の意識の中での障壁の大きさを確認しておくことにする。実際の交婚そのものについてなどその他の側面については、別稿にて報告するつもりである。

3. 異人種・民族間結婚とナショナル・アイデンティティ

この異人種・民族間結婚、特にインド系と黒人系をめぐるテーマを選んだ理由はいくつかある。その一つがナショナル・アイデンティティのあり様との関係についてである。長い植民地支配を経て、ガイアナ、トリニダードは、それぞれ英国より1966年、1962年に、またスリナムは1975年にオランダより独立した。人種・民族構成に多少とも差異は見られるものの、前述のとおり、黒人系とインド系を筆頭にした多人種・多民族国家が形成されている。しかし、特に黒人系とインド系の関係が良好でないことが多かったため、またガイアナのように国を二分するほどの対立抗争を経験したりすると、国民としてのナショナル・アイデンティティなどなく、またもちようがない、そして育ちにくい、あるのは人種的・民族的アイデンティティだけだ、と現地の人々がコメントしたようなことになりかねない。最終的には、ナショナル・アイデンティティのあり様を探るのがより大きなテーマであるのだが、それを扱うのに重要なことは、異人種・民族間関係の真相をよく知り、かつ理解することであり、それによって、より真実に近い相互感情や見解が見えてくるはずだと思う。それには、単なる抽象論や社会集団論の観点からではなく、生々しい実体をもった人々の生き様、諸経験の集積からながめてみる必要があり、その方が多様な実態もよりよく理解できるだろう。

共存共住する異人種・民族間の関係が最も劇的な形で表され、心情が吐露される領域は、男女関係及び結婚に関する事柄と推測する。男女関係及び結婚関係においては、建前ではなくいわゆる本音が最も正直に、しかも露骨に出てきがちであるからである。社会生活を営むうえで、たとえ表面的に繕ったり、装うことはできても、きれいごとのみで男女関係や結婚生活に入り、またそれを続けていくわけではない。この調査を実施するにあたって、このような結婚についてどう思うかを尋ねる時、筆者が抱いていた考え、つまり結婚に関して、人々は最も進歩的にもなりうるが、かなり保守的であることが多い、そしてそれが異人種・民族間という特殊な状況では、それが最も鮮明に出てくるのではないか、という旨を被調査者に言うと、大多数は笑いををもって同意したものであった。「こと結婚に関しては…」という頑固な考えは、特に多くのインド系の人々の意識の中に埋め込まれてあった。

配偶者ないし持続的男女関係のパートナーが異人種・民族であるということは、そのパートナーが属するかアイデンティティを感じている人種・民族集団一般についても、何らかの意見表明をさせるようである。また同時に、同様のことが、自らの（あるいはそう感じている／思っている）帰属集団についても言える。つまり当人は、親しい男女関係や結婚関係を通じて、既存の人種・民族集団の中の個人と、そういった枠にとらわれない固有名詞をもつ個人との両方を、密接である程度持続的な関係の中に経験的に混ぜ合わせているのである。そこには、人種・民族に関して相矛盾するような評価や感情が入り込む可能性が大きい。

ところで、調査地のような社会においては、多人種・民族が共存共住している事実、そして特にその相互関係抜きには、「ナショナル」という意識はなかなか出てこない。特にガイアナやスリナムのような人口密度の低い大陸部国家社会においては、首都などの都市部を除くと、頻繁な相互交渉が日常的に見られるわけではない。総選挙や国家的記念日ないし行事という、政治や作られた国への意識を特定条件のもとに与えられるような場合を除くと、ともすると国家の一員とかナショナル・アイデンティティなどあまり関係ない、ということにもなる。また移民／移住、出稼ぎといった状況が顕著なこれらの国にあっては、家族や親族、友人、知人の一人くらいは旧宗主国やアメリカ合衆国、ベネズエラ、ブラジルなど近くの大国をはじめとする外国に居住しているのが一般である。彼らの存在は否応なしに、ナショナル・アイデンティティを心の中で反芻させる。彼らとの交信、彼らよりの送金や品物の送付、さらに彼らを訪問する、な

どの理由でパスポートを申請し保持する、またビザの申請をする、といった一連の状況は、かなりの程度をもって自国について、またその国の国民であるという事実をいやというほど突きつけてくるものである。

それがひとたび異人種・民族間結婚という状況に巻き込まれ、さらにその子供が生まれるとなると、その混血のアイデンティティの問題などもあり、輪をかけて複雑になってくる。そのとき混血の子供は、多くは既存の人種・民族的アイデンティティをもつこともないし、またできない。集团的行動をとらざるをえない時には、どちらにも属さないため、仕方なくより身近に感じ、違和感が少ない方を選ぶ、といったこともある。民族的アイデンティティとの同一化が不可能だと悟ったその瞬間より、程度の差はあれ、ナショナル・アイデンティティについて考えざるを得なくなるのである。

建国以来20-30年という若い国家の中で生きていく時、国家を二分する程の対立が潜在的に存在していると人々がおそろおそろ感じているようなガイアナにおいては特に、民族的アイデンティティのあり様や、同国内の他人種・民族への評価や個人的感情を探る必要がある。そして人々の移動、特に奴隷制、年期奉公制、出稼ぎ、移民/移住がかなり頻繁であった歴史をもつ社会の中で、他人種・民族、そして他国人との接触がきわめて多い環境の中で、若い国家の一員としていかにナショナル・アイデンティティが規定され、形成されていくのだろうか。人種・民族的アイデンティティとナショナル・アイデンティティとのバランス、あるいはぶつかり合いを人々は様々な局面で経験しているが、それはいかなるものだろうか。そのような時に、この種の結婚の問題に光を当てることで、興味深い知見が得られるのではないだろうか。

4. インタビューにおけるいくつかの示唆すべき点

本調査テーマのように、いわゆる本音と建前のギャップがかなり大きく出てくる場合、インフォーマントにより、また当人との関係などにより、得られる情報の質も量も異なってくることが多い。特に対抗的關係にある相手に関して、両義的感情や見解をもっていたらなおさらである。そして実際、そうであることがかなり多かった。また他人はおろか、パートナーを含めた身内や親しい友人さえも知らない、きわめて個人的な情報や秘密にまでも踏み込んでゆくインタビューとなることがほとんどだったため、詳細な情報を得るまでに、インフォーマントとのラポールを短時日のうちに確立するか、その場で作り上げる必要があった。

また自社会をなるべくより良いイメージで語りたいという一種の愛国心も、現代では多くの住民に見られる。そのようなことを尋ねられると、心中穏やかでなくても、表面的には人種偏見や差別の欠如、混血への賛同、多人種主義 (multi-racialism) の肯定、他者への寛容さ、異人種・民族の調和した社会、という理想的なイメージを強調しようとする人も少なくない。そしてこのような社会こそが、地球上のこれからの新しい社会の理想的なモデルになるのだ、と付け加えられることさえある。つまりあるべき姿をそのまま現状肯定的イメージとして定着させ、流布することもあるのである。それは政府が外国人観光客や外国資本などの誘致の際に使いたがる内容である。

他方、事実以上に相手のイメージを歪曲したり、大げさに否定的側面を強調したりすることもある。それは相互に認識されている、あるいは内化されているイメージとして調査の対象にはなるが、事実とはかけ離れていることが多い。特に過去、現在にわたり、実際に相手人種との何らかの衝突ないし争いがあり、しかも被害を被った場合、部外者に聞いてほしいという気持ちがそうさせることがあった。

人前でものを言う、また家族外労働に従事し、他者との接触が増し広がり、自分の意見をもつようにな

ったインド系の女性でさえ、従来の「おとなしい」、「しとやか」、「従順」、「出しゃばらない」態度に甘んじようとはしない。彼女たちも一度話し相手との相互関係に信頼感、安心や親密さが芽生えたと感じるや、心を割って話をしてくれるようになり、醜悪な人種偏見と差別の現実の姿をも教えてくれる。

相手への評価には当然既存のイメージが根底にあるが、その強化や修正は日常的観察、接触、親しい間柄の人からの噂、また根拠のない風聞などによって多少とも影響を受けている。それには当然、本人や家族の居住区、階級や階層（インド系は「カースト」^{註4}も）、性、職業及び職場での地位や労働条件、職場環境、収入、財産、年齢、教育歴や学校生活での友人・教師との関係、宗教的信条や行為、性的関係（交渉）や婚姻歴、イメージ形成当時の社会状況、政治的、経済的利害などの要素も絡んでくる。

これらの要素は、質問自体が喚起してしまう特殊な心理状態、思考経路の変更などを伴う調査者との関係を、試行錯誤のうちにみきわめさせるものでもある。また、本人の中でのイメージ形成自体をしばしば省察させ、自己の偏見度をより客観的に評価させることにもつながる。

しばしばインタビューの過程で、「そんな事、今まであまり考えたことはなかった。」とか「今まで漠然と思ってきたけど、今聞かれてちょっと考えてみると、そう簡単に××と言ってしまっただけとはいけないと思う。」、「言われて／聞かれてみると、新たに意識してしまう。」といった感想がもたらされた。これらの人種・民族に関する質問は、一般に平常の状態では、何かをきっかけとして明確な形をもったり、感情を喚起するもののようである。

大多数の現地の人は、調査者の様々な質問自体に興味を示しつつ、正直に応答してくれた。外交辞令のたががはずれ、親密さを増した関係に入ったと判断するや、インフォーマントは、主に不仲あるいは対抗関係にある相手に対しては、容赦のない批判やあからさまな軽蔑を徐々に表したりした。偏見や猜疑心に満ちたものもあった。差別意識も濃厚で、受容的態度は極度に低い人も少なくなかった。時々、敵意や憎悪に満ちた荒々しい捨てぜりふも吐かれる。調査者のような異文化保持者、異人種・民族に対しては、「だから彼らには注意するように。」という忠告も付け加えられた。しかも「私は決して人種主義者ではないし、偏見もない方だと思っているが。」と自己正当化を忘れない。

人種、民族に関する質問は、特にガイアナでは、選挙や政治的対立が明らかに意識されるにつれ困難になる。それはその態度表明を、中立、寛容といった立場も含めて、自らもしなくてはならないという気持ちにさせてしまうものだからである。日常生活での経験や考えとはやや違ったものも生まれてくるし、場合によっては極端なかたちをとることさえある。意識がより敏感になり、人種・民族と政治に関することでは常に、この二人種間の相関関係が強調される。

それは、二大政党が人種と密接に結び付いてきた歴史を反映しているからである。92年10月5日の総選挙で政権をとった人民進歩党PPP (Peoples' Progressive Party) はインド系、人民国民会議PNC (Peoples' National Party) は黒人系と不即離につながってきた。

日常的にはたいした意味がなくても、やはり人種的・民族的偏見に満ちた表現をとってしまうことは日常茶飯のことであった。また政治的、人道的配慮をしすぎて、かえって本音が出てしまうこともあった。そうは言っても、この二人種間関係において最も本音が出てくる領域は結婚に関してであった。

5. 3ヶ国における兩人種間の結婚についての概略

両者の交婚のあり方は国や社会により、一国内でも地域により、階層や人種・民族内の社会的位置づけ、性や、年齢層、教育程度、海外経験など、そしてもちろん個人により、大きな差異が見られることは言うまでもない。また交婚自体は、例は少ないが、その兩人種の出会いの当初より見られた現象ではある。

調査した3ヶ国の中で最も交婚が進んでいるのはトリニダードで、次にガイアナ、最も分離主義的なのはスリナムである。トリニダードでは、首都ポート・オブ・スペインやその近郊で多い。ポート・オブ・スペインから東へ伸びるハイウェイ沿いのいくつかの町、例えばサン・フアンやUWIのあるセント・オーガスティンなどでも混血が多い。ポート・オブ・スペインに隣接するセント・ジェームズ地区もよく知られている。南部のインド系が集住している地域はまださほど多くはないし、内部の人は避けたがる傾向にある。

これらの地区の人々の中では、トリニダードではかなり雑多に交婚が行われ、混血していると認識されている。人種や民族についていちいち気にしない、と言う人も少なくない。つまり、あくまでも特定個人を相手にしているのであって、人種や民族の代表としての個人ではないことが、自然に強調されたりする。そして××系ということを書えなくなるほど混血しているような状況をもって「真のトリニダード人」、と評する人さえ多い。特にそのような例を実際に知っており、身近に交際または見聞したというインフォーマントは、交婚や混血に対して非常に肯定的である。

そうでなくても若い世代は一般にくったくがない。積極的にそのような相手を探し求めはしなくても、ほとんど常に解放的である。自らが混血の子孫であればなおさらで、問題が生じる可能性を知りながらも、一般的には混血性に対して前向きである。この若い世代の寛容さや鷹揚さは、主に現行の教育体制によるところが大きい。かつての植民地時代よりの遺風を受け継ぐいわゆる「伝統校」でも、多くが教育改革のプログラムに取り組んでいる。学校により、そしてそれが主に宗教、宗派と結びついたものであったがゆえに、その宗教や宗派と人種や民族との関係で、今も人種・民族的に偏向が見られる。つまり黒人系ないしインド系が多いという特徴は残っている。しかし他の人種・民族も増えつつあり、教師や生徒の間で、特に人種差別やこれに類する問題は起きていないようである。全般的に男女共学、多宗教主義ないし宗教の多元主義へと移行しており、校内で各宗教のサークル活動が行われている所もある。

インド系の中でも、居住地他の上記の要因などにより、交婚に対する評価は分かれてくる。一般的にはまだ躊躇しがちであるが、都市的環境になじみがあり、教育レベルも高く、進歩的なほど寛容である。ヒンドゥ教徒は内部の教派を問わず、交婚をタブー視する傾向が強い。「インディアン・ナショナル」と呼ばれるインド本国人は、「ダグラ」あるいは「ドゥグラ」(dogola, dougla)^{註5}と呼ばれる、インド人と黒人の子供に対して、拒否反応を強く表す。それはヒンディ語で「私生児」を意味するからである。ただしトリニダード全般では、この原義はほとんど薄れ、むしろ中立的用語として用いられている。現在はヒンディ語理解者も著しく減少していることから、その原義について全く知らない場合も多い。

これについてはガイアナも同様である。

スリナムではヒンディ語話者が少なからずおり、またトリニダードやガイアナに比べて学習にも熱心な人がいるので、その原義は理解されているところもある。

また後に簡単に述べるし別稿にて扱うつもりでもあるが、交婚において問題とされる重要な項目の一つに宗教がある。異宗教間結婚も異人種・民族間結婚と同様に、“intermarriage”と括られる中に存在している。現代の人々の生活の中で、宗教的な規範や行動様式は見逃せない役割を果たしている。

異人種・民族間結婚の上に異宗教間結婚が重なると、異質性はさらに大きくなる。異人種・民族間結婚の場合でも、同じ宗教ならそうでない場合よりも実現の可能性は大きく、また安定性は高くなる。また同じ宗教の中でも派に分かれている場合、またその差異が強調されるのが常であることから、その宗派ないし教派の異同についても考慮する必要がある。言うまでもなく、同派内の方がそうでない場合よりも、交婚実現の可能性は大きい。結婚後の関係の良し悪しや安定性、また諸問題への対処の仕方の成否にも、これらの宗教的領域は大きく関わってくる。それは3ヶ国各々の宗教事情は異なっても、影響を及ぼすという点では変わらない。

スリナムでは、一般に社会相互交渉の場合でも、首都パラマリボおよびその近郊を除いては、インド系は黒人系との密接な関係を避けようとしているのが現状である。街の通りをインド系と黒人系のカップルが仲睦まじく歩いているといった光景にはまず出会わない。人目につくところで、そのような夫婦ないし親しい男女のカップルが二人そろって行動するのは、知合いの間でが最も多い。主にパラマリボの市内及びその近郊で交婚が見られ、その混血子孫が生まれている。それも社会的に気づかれるようになってきたのは、近年になってのことである。その例も決して数多いというわけではなく、また急増もしていない。しかもほとんどの例が、キリスト教徒ないし無宗教どおしの場合であった。

スリナムの主要な宗教の中では、キリスト教が最も多人種・民族的で、かつ融合的ではある。しかしそれでもいくつかの派や各教会ごとの民族的アイデンティティが強く出ている所が少なくない。中国人教会、ジャワ人教会というように分かれているものもある。ヒンドゥ教はインド系のみ限定される。イスラム教はジャワ系とインド系に多く、黒人系もいないわけではないが、同宗教内でのインド系と黒人系の結婚例は、ほとんど聞かなかった。しかしまだ調査が不十分なため断定はできない。オランダ改革派やルーテル派などの中では、インド系と黒人系あるいは混血のカップルのいくつかの例について教えられたり、実際に話を聞いたこともあった。しかし一般的には、同人種を選択する傾向が依然強い。相手が無宗教か宗教をさほど重視しない場合は、可能性は大きくなる。

ガイアナでも多少の差はあれ、同様である。ただしインド系が黒人系と交婚する頻度はトリニダードほど高くなく、また否定的感情もより強い。したがって、その混血ダグラ人口もトリニダードほど多くはない。しかしスリナムほど同人種・民族志向でもない。ガイアナについてはまた詳しく述べるので、ここでは割愛する。

興味深いことだが、この社会現象としての交婚が目立ち始めたのは、各国での独立期にほぼ該当している。この二つの事柄の間に相関関係があるのかについては、詳細な資料に欠けるため、推測の域を出ない。今後のさらに詳しい調査と注意深い考察が必要である。

6. ガイアナにおける同人種間関係

ガイアナの人種・民族構成は、1990年の人口約76万5千人のうち、インド系約51%、黒人系および混血(ムラト)で43%、アメリンディアン(先住民)は4%、ヨーロッパ系と中国系で2%である²⁶。(宗教的には57%がキリスト教徒、33%がヒンドゥ教徒、9%がイスラム教徒、残り1%がその他となっている。イスラム教徒の大半はインド系である。キリスト教徒のインド系も決して少なくない。ただし人種・民族別の統計的な数字は、現在までのところ存在しない。)つまりインド系は過半数を占めており、奴隷制時代以来多数派であった黒人系を凌駕するに至っている。

1834年の奴隷制廃止以降、インド人は年奉公人（indentured labourer）として、1838年より主に砂糖プランテーションでの大量の労働力不足を補うために連れて来られた²⁷。彼らは当初より社会を二分するほど反目し合ってきたと言われている。相互の偏見や差別意識は、今でもきわめて根強い。一般に黒人は、自らが奴隷制との連想で忌避した農業に「奴隷」同様働く異言語、異宗教の新来者インド人を軽蔑してきた。またインド人も、元奴隷の黒人を、文化も教養もない野蛮人と見下してきた。労働環境や条件は類似する点が少なくなかったにせよ、「奴隷」という表現にはこの他嫌悪感を覚え、インド人は自分たちが方が上等であったと自負してきた。インドでの農業の知識、技術や経験は、インド人に土地や農業への執着とでも言えるものを残してきたが、そのことは奴隷制以降、農地よりいち早く離れていった黒人系とは正反対の考え方と行動であり、その歴史的経緯が双方の蔑視の根源にある。

居住地域も、基本的には黒人系が首都ジョージタウン、ニュー・アムステルダム、リンデンを中心とする都市や町に、インド系は海岸沿いの砂糖や米のプランテーションなど農村部を中心としてきた²⁸。都市内では現在、人種や民族の差よりも階級差が住み分けに結びつく傾向が強い。特に下層階級の間では混血も行われたり、共住している地区もある。筆者が調査した地区Aは、交婚や混血が最も多く、そして進んでいると言われていたが、「あの人たち（＝貧乏人）は、全く相手などおかまいなしだ」という主旨の批評がよくされていた。しかし共住し、混血は見られても、相互の不信感が消えておらず、わだかまりが感じられる。調査地Aもその例にもれず、人種差別的発言は日常的に聞かれ、特にインド系と黒人系の間で露骨に表された。その大きな要因は、ここがPNCのある有名な政治家の出身地区および選挙区であり、政治的ギャングの巣窟、そして犯罪者の温床（というよりは「泥棒町」）の場を地区内に多く抱えているからである。

人口比のバランスの問題は、黒人系、インド系双方の間で様々な思惑を生んできた。もちろん両者のみならず残りの少数者の間でも、自己認識あるいはアイデンティティ、特に人種・民族的アイデンティティ、ガイアナ人というナショナル・アイデンティティについて相互のイメージを確認しながら、思いを巡らす要因となっている。

数の上での順位は必ずしも勢力争いでのそれと一致しない。政治的力は、10月5日の選挙までの28年間、PNC政権下で黒人系が牛耳ってきたと言っても過言ではない。この間、インド系は多く公的部門から閉め出されたような形になり、主に農業や商業活動に専心してきた。様々な公的部門の人種・民族別人数を見れば、そのアンバランスに愕然とさせられるくらいである。政治、軍隊、警察機構は黒人、経済はインド人、という構図は共有されたイメージである。金融関係を扱い、支配するインド人に、今回の選挙で政治的力まで奪われた、というような単純化された認識が意外なほど多く見られた。特に黒人は内心穏やかでなく、嫉妬が強く感じられる発言をきくことが多かった。

人々が平和裡につつがなく生活したいと思うのは、当地でも同じである。日常生活の中では、一般に表面的にはそれが実現されていると言ってよい。相手が××系ということだけで、とりたてて目くじらをたてることもない。少なくとも、社会・経済的行為をスムーズに行えるように、相手を敢えて怒らせたり、特別に不愉快な思いをさせないような配慮をすることができる。嫌いな相手でも、つつけんどんな態度に出ていたら、社会・経済的行為の多くの場面で、もめ事の生起は必然的である。親切ではなくても不親切ではなく、そしてむしろ本心なるべく隠しての言動も期待されている。微笑や慇懃無礼な態度をもって接触する術さえ身につけている。かくして、穏やかでなごやかで明るい雰囲気の人種・民族間の相互関係や交渉を見ることもできるのである。

しかし前述のとおり、必然的とも思われるようなかたちで、様々な葛藤や大小の争いなどは生起してき

た。なかでも黒人系とインド系の間では、必ずしも全般的にはないが、相互に越え難いほどの悪感情や否定的偏見や差別意識が蓄積されてきた。一見平穏で良好と思える相互関係はあっても、実際心を割ってよく話をきいてみると、相互の悪口雑言は際限なく一方的に続きうる。面と向かって「クーリー (coolie)」や「ニガー (nigger)」など最も唾棄される蔑称を用いるのは、よほどのことである。しかし、激情を伴う場合、喧嘩 (特に口論、罵倒)、言いがかりをつけられたり、気に入らない態度を見せられた時、背後から捨てぜりふを吐くなど、より間接的な場面では結構使われる。またその言葉が聞かれてしまう、といったことでさらに、売り言葉に買い言葉の応酬が繰り返されたりする。無視したり、あからさまに拒絶的な、あるいは軽蔑するような目つきや態度、嫌悪感を隠しきれない表情さえ、ときには目撃される。身内や仲間内だけになると、あるいは他人でも気心が知れたりすると、暗黙の了解で、不特定指示を含む言葉で表現される。もちろん具体例をまじえて、露骨な独特の婉曲表現で話されたりもする。それは日常会話の中でも経験されることである。

そしてそれが高じると、政治絡みの暴力行為を含んだ事件にまで発展する。人種対立が現代史の中で最も激しく爆発したのは、62年から64年に断続的に起きた暴動である。62年、64年のものは特に悲惨だった⁸⁹。暴言、投石、殴打、刺傷、強奪、暴行、焼き撃ち、殺戮等の暴虐はとどまる所を知らなかった。CIAの介入で人種的憎悪に火がついたと言われているものの、この恐怖と戦慄に満ちた悪夢は今だに人々の記憶に新しく、今回の選挙でもその再燃が大いに危惧されたのだった。

そうであるがゆえに、葛藤やめ事を事前に回避する方策や知恵も生み出され、体得され、日頃は実践されてきた。奥地、都市から離れた農村や田舎の方では、異人種・民族を全く見かけないこともありうる。それでも近年の人々の移動状況から判断しても、一生涯出会わない、接触がないという例はほとんどない。インド系が多いコミュニティの中でも、少数の黒人系が混ざっていることも決して稀ではない。もちろん不仲のため挨拶さえ交わさない、また家の中から彼らの様子をうかがうといったこともある。しかし不必要な誤解、不信感をかえって抱かせないための所作もする。気に入らなく、また敵意を抱いている相手であっても、隣近所のつき合いでは社交辞令やあいそ笑いのようなカモフラージュも工夫して身につけている。

そのような戦略的な意味がなくても、自然な近所づき合いの中で、「良き隣人」や友人にまで発展する場合もある。相互に家族、親族、姻族の問題も含め、話し相手、相談相手になることもある。黒人の中にもヒンドゥーやイスラムの儀礼を観察し、インド料理を習い、インド音楽やダンスと一緒に興じたり、インド映画を見たりする人は少なくない。また婚姻儀礼や葬儀に招待されたり、参じた黒人も結構いる。今回の調査中にも、ガイアナではインド系の5組の婚姻儀礼に、また2人の葬儀に行ったが、黒人系および混血の会衆が全くいなかった例は、1人の葬儀の時のみであった。個人の家などにおいて様々な目的で行われる神像礼拝儀礼 (プージャー、pūjā) の場に、友人あるいは親しい隣人ということで顔を見せた黒人もいる。

インド系も黒人系のクリオール料理、音楽やダンス、アフロ・キリスト教系宗教の儀礼を見聞してきた。冠婚葬祭への招待などをきっかけにそれらを観察し、また参加するようになった例もある。様々な相互交渉のなかで、彼らは異文化を楽しみ、共有する知恵も知らず知らずのうちに体得したといえよう。そしてこのような人々の中には、さして偏見ももたずに、好意的な見聞や感情をもち、関係を発展させてきた人もいた。また否定的な偏見をもっている、隣人関係を築いていくうちに自らの見方や考え方、態度を修正されていく人もいる。なかには交婚へ入る場合もある。

もちろん隣人関係や異文化の観察や参与の中で、逆効果が生まれることもある。少し知った、または体験した際の否定的印象が、かなり大きな影を落したりする。また、隣人関係は良好にもてても、結婚だけはやはり避けたい、許さない、といった頑固な態度を崩さない人もいるのである。

7. 交婚に否定的な理由

ところで、異人種・民族間結婚を拒み、または推めるのに大きな影響を与えている一つの要因は、各人種・民族が相互に抱くステレオタイプのイメージである。これはかなり根強く存在してきた。それは歴史的關係や植民地という特殊な状況で作られてきたものでもあることから、その表現は単純に見えても、実際は複雑であることが多い。屈折した、または両義的、二律背反的な感情が込められたものもある。

ここでは、黒人系によく当てはめられるイメージで典型的なものを列挙しよう。一般に黒人系の与えるステレオタイプのイメージは良い評価を得ないものが多く、事例はきりがなほど多い。また同じ表現でも、その意味する内容やコンテキストにおいて多少差異が見られる。なかには部分的に重複するものもあるが、肯定的なものと否定的なものに分けてみよう。肯定的なものの中にはステレオタイプになっていないものもある。

肯定的なもの：「陽気」、「楽天的」、「お人好し」、「気前がいい」、「丈夫（身体強健）」

否定的なもの：「醜悪」、「臭い」、「ばか」、「無教養」、「うすのろ」、「怠け者」、「盗人」、「犯罪者」、「嘘つき」、「ずる賢い」、「いかつい」、「狂暴」、「女たらし」、「性的放縦」、「セックス狂」、「無責任」、「放浪癖」、「アルコール中毒」、「酒乱」、「遊び人」、「麻薬中毒」、「浪費癖」、「ギャンブル好き」、「計画性がない」、「将来への見通しがない」、「今／今日のことしか考えない」、「だらしない／無節操」、「家族を大事にしない」

これらのリストの内容や背景についての説明はここでは割愛するが、さらに項目を付け加えることに喜びを感じる人々さえいることを付記しよう。

ではこれらは黒人系のみ「特徴」的なものなのかというと、実はそうではない。インド系のイメージはどうだろうか。黒人系の場合と同様に、肯定的なもの、否定的なものを列挙してみよう。

肯定的なもの：「つつましか」、「誇り高い」、「将来への見通しがよい」、「家族、親族を大事にする」、「一族の結束が固い」、「節約・儉約」、「勤勉／働き者」、「自分の文化をもっている」、「美人が多い」

否定的なもの：「金儲け主義」、「排他的」、「せちがらい」、「傲慢」、「嫉妬深い」

一般的イメージとして否定的なものは黒人系ほど多くはない。

ただインド系男性に対する評価は、ある人々の口を通すと、黒人系のリストのいずれも該当するという。上記リストのうち「女たらし」、「放浪癖」、「酒乱」、「狂暴」、「遊び人」などは頻繁に言及される。特にインド系女性からみた評価は厳しい。

このようなステレオタイプのイメージは、もちろん現実のある面を言い当てているものではあるが、それが全てではないし、個々人を見れば、それがいかにいい加減なものかもわかる。また肯定的なものの裏返し、つまりそれが度を過ぎると否定的なものに容易に転化しうるし、また逆もそうであることが多いように、必ずしも固定化されたものではないことを注意する必要がある。

異人種・民族間結婚で躊躇あるいは嫌悪するのは、ほとんどの場合非黒人系であり、一般的にはインド系が最も排他性を強く示すことは前にも述べたとおりである。彼らの中には「黒人でなければ誰とでもよい」とさえ言う人もいるくらいである。特に大多数の人が必ずと言ってよいほど言及する嫌悪すべき（あるいはそれ程強いニュアンスはなくても、気にならない）点は、身体的特徴や容貌といった、黒人個人にはどうすることもできないものである。特に「チリチリの髪の毛」、「真っ黒な肌の色」、「強烈な体臭」は、頻繁に言及される生物学的3点セットである。髪や肌の色の拒否反応については、同じインド人でもウェ

ーブやカールのかかった毛髪をもち、色もかなり黒い南方系あるいはマドラス系の間でもほぼ同様である。体臭については、黒人は何でも（穢れたものでも）食べる、特に豚肉も食べること、そして汗をかいてもシャワーで清潔にすることを頻繁にしない、といった理由をインド系は挙げる。ただし、近年、オーデオロンや香水をふりまくことが一種の流行のようになり、やや緩和されたと評される。

インド系の視点からみると、インド人はインド人と結婚し、インド文化や伝統を存続させていくべきだ、と考える傾向が今だに強い。年期奉公制の時代以来、移民第一世代は多くがヒンドゥ教徒であった。「結婚」相手はヒンドゥ教徒であるべきだというのがヒンドゥ教の教えで、その「伝統」に従うのが当然と考えられていた。実際に例外も多くはなかったようである。少数のイスラム教徒の場合も相手はイスラム教徒が原則であったが、同じインド系を選ぶことが一般的であった。同人種、同宗教、同宗派の間の結婚という伝統的形態の多さなどは、結婚登録所（Registrar Office）に保管されている記録を見れば一目瞭然である^{註10}。

しかし、このことはインド人と黒人の結婚、あるいは性的関係が全くなかったことを意味しない。文献から立証することはかなり困難だが、関係を結び、共住し、その足跡を残してきた例は話で伝えられている。それは主に独身のインド人男性が黒人女性と性的関係をもつ、あるいはその中から結婚相手を探したところから始まったようである。そこにはインド人年期奉公人の男女比、年齢層、既婚か未婚か、家族同伴か単身か、といった要因が絡んでいる。未婚の女性は、未婚男性に比べてかなり少なかった。同じプランテーション内の労働者の中から、また近く of 農村の中から、とインド人男性は黒人女性に目を向けていったようだ。

過去の事情については、このようなことをインタビューした者がほとんどいなかったため、まだ詳細にわかっていない部分が多い。老人層の記憶が明瞭に残っているうちに、性急に詳細なインタビューが必要である。筆者もいくつかの村でインタビューしたが、不完全であり、次回の調査の課題の一つとして残した。ただ得られた情報では、当初のそのような段階での結婚は、それほど奨励されたり、歓迎されはしなかったものの、決してそのカップルが常に村や家族・親族関係より追放されたり、排除されたりしたわけではなかったようだ。このような状況を生み出す原因も一般に理解されていたらしいことがうかがえる。また個別のプランテーションないし村落等での両人種間の関係が、常に陰悪であったわけでもない。ある所では、またある人々の間では、良好な隣人関係、友好的な共存関係、あるいは少なくとも相互に敵視、蔑視しない関係をもてたことが示唆される。現在でもいくつかの村や町では、混血度が他と比べてかなり高く、そして交婚に対してかなり寛容だと言われている。ただしその詳細についても、さらに調査が必要である。これまで得た情報から、その内容は情報源により変差が見られるし、「誤報」も含まれていた。いわゆるダグラが多い村、交婚率が高い村を教えられて行っても、少なくとも現在はほとんどいない、ということもあった。

特にインド系からの反発や屈折した感情に根強いものがあることは、黒人側の対インド人感情や態度の否定性にも影響を及ぼしている。人種や民族を問わず、まず大方は「黒人は誰とでも性的に交わるし、一緒になるし、結婚もする。最も混血に対して批判的で、回避しようとするのはインド系である。」という主旨の表現をする。黒人系はインド系との性的交渉や結婚に強く反対はしない。むしろ好ましいと考えている人も多い。そうすることで子供の代には、少しでも髪がまっすぐに、色がより薄く、容貌がよりヨーロッパ系に近づく可能性が大きくなると思うからである。またインド系は相対的に金持ちというイメージがあるので、その財産なりを部分的に譲渡ないし継承してもらえる可能性も期待したりするからである。

この地域の民族性、国民性の一つである陽気さ、寛容さといった性質の基に、異種の人との親密な交際

や性的結合があったから、とよく言われてきた。たしかに社会の人々の大半は何らかの形で混血していると考えた方が実際は正しいだろう。歴史的にみて純血を誇れる人は多くはないはずだ。人前で純血を誇る人にも、異人種・民族の婚外交渉の相手がいて、その子供をどこかでもうけているといったことさえしばしばある。

それは、この地域の大半を占める黒人系の間で多くみられる特徴の一つとして知られている。アフリカ黒人奴隷の子孫であり、プランテーションその他の場で異人種、特に白人と性的交渉をもった例も少なくなかった。カラード、あるいは「茶色の人々」、つまりムラトは明らかにそういう混血の子孫である。ともあれ黒人系やムラトは、混血の繰り返しでできた独特の融合性、曖昧さを積極的に捉え返せる人種・民族観を培ってきた。それは閉鎖性、純血主義、排他性を論理的に否定せざるを得ないことを示す。それゆえ彼らは、このような人種・民族観に根ざした文化意識をもっていると言ってよい。それが、交婚を積極的に否定しない傾向につながっている。

ガイアナでは1960年代にブラック・パワー運動が盛り上がったが、ジャマイカやトリニダードなどいくつかのカリブ海地域社会で今もなお強く感じられ、また文化的にも勢力的に取り込まれている黒人意識（運動）は、現在はその影響力を失っている。「アフリカ」を強調する政治的あるいは文化的活動も弱い。そしてこのことは、黒人系の自己意識や対人種・民族観にも影響を与えていると考えられる。男女交際や結婚相手の選択に、優先的条件ないし好みが見られるが、その内容を検討すると、黒人系に特徴的だと思われるものを挙げることができる。しかしそれだからといって、その内容が他の人種や民族に共有されていないということではない。ただ他と比べて、集団としてよりは、ごく個人的な好みの問題に集約できる部分が大きいと考えられる。

その点、インド系の場合、「インド人だから」という集団的意識がかなり強い。そして厄介なことに、「インド人だから、、、黒人（だけ）はね、、、」となる。

もちろん、ここではかなり一般化して言っているものであり、黒人系、インド系それぞれのなかで、第4節で挙げたような様々な要因や条件により、変差が大きい¹¹¹。

黒人系が異人種・民族との性的交渉に関して、かなり解放的で積極的なことで知られてきた、と先に述べた。彼らにとって、インド系の相手、あるいは結婚相手の候補者がいるということは、一般的には当人と「家族」にとって「誇り」となりこそすれ、恥ずべきこととは扱われていない。多くの場合、仲間の羨望の対象になりうるくらいである。インド人の女の子をくどき落とし、特定の男女関係に入る、そして性的関係をもつことは一種の「勝利者」宣言にもなりうる。

それでも、若干の危惧する意見は聞かれる。その理由は「あまりにも文化の差が大きい」、「違いすぎる」、「今は良くて、ずっともつだろうか」といった文化の差異に由来するものに集約される。かくして「黒人は黒人の方が無難」、「インド人の女はしっかりもので家庭を任せられるだろうが、もの足りない（かもしれない）」といった表現が出てくる。何らかの問題の可能性を予測して、否定的見解の方に落ち着こうとさえする人が少なくない。

異人種・民族間結婚、特にインド系と黒人系の間の場合は、要約すると、両人種・民族間に固有の葛藤やめ事をさらに複雑なかたちで追増する要因にもなってきたし、またなりうる、と否定的に扱われている部分が大きくある。それを強く危惧する声がインド系の間で断然強いのだが、同様のことが実は黒人系の間でも感じられている。インド系は黒人系との結婚を軽蔑し、嫌悪するばかりか、宗教的な制裁（サンクション）を示唆したりする。ヒンドゥ教徒の多くがそうである。つまり、ヒンドゥのコスモロジーからは逸脱すると言われ、「アウトカースト」と見做される。そして多くの場合、黒人系と結婚する、あるいは

はしたインド系は、村やコミュニティを離れ去るを得なくなったりする。結婚後、インド系側の家族・親族との絆は切れ、文字通り「家を追い出される」という表現で語られる存在となる傾向は否めない。

以上、黒人系とインド系との結婚の障害となるいくつかの要因をみてきた。ここでは一般的な特徴を述べるにとどめたが、もちろんより細かい点に注意しながら現状をみていかなければならない。性差や宗教的背景などは、そのなかでもかなり重要な問題である。またこの種の結婚を現在しているか過去にした経験について、そしてそれがもたらす肯定的な側面（たとえば兩人種間の葛藤の軽減ないし解消、より良好な関係の創造への貢献）などについても別稿にて述べるつもりである。

注1 91年度は比較調査のため、インド系は少ないが混血も見られるジャマイカも含めた。

注2 92年の調査時には、ドイツの人類学者が似たようなテーマで調査を行い、じきにその結果が公表されるだろうときいた。

注3 当時の野党をはじめ多くの国民は、28年間の与党の「独占的支配」という表現をよく使っていた。

注4 カリブ海に渡ったインド人の中では、本国での社会制度や伝統等を完全に移植することは不可能だった。「カースト」もいつの間にか崩れ、今では自分でそう認識し、それにアイデンティティの一部を感じている「ブラーミ（マ）ン／バラモン」層のみ気になるくらいである。「カースト」に関しては、気にするにしても、「ブラーミ（マ）ン／バラモン」かそうでないか、という区別が最も重要な基準になっている。

注5 表記は一定していない。

注6 ガイアナは“land of six peoples”と言われ、その人種・民族構成については、インド系、黒人系、アメリンディアン、中国系の他、ヨーロッパ系を白人ヨーロッパ人とポルトガル人と区別して用いることが多い。

注7 年奉公制（indenture system）は1917年に終了したが、その間のインド人移民の合計は約24万人と言われる。ただしそれ以降もインド人は移民してきている。

注8 町や村ごとの人種・民族的住み分けないし共住状態はおおざっぱであるが調べてある。ただしここでは省略する。

注9 現在、大多数の国民は、これらの暴動は政治家たちの煽動によるものであり、それがなければ相互に憎悪し合うこともなく、平和に共存できるし、ふだんの生活ではそうだったと言う人も少なからずいた。主に政治家たちに雇われた、あるいは政治的指導者に「忠実な」政治ギャングや政党员的のやからたちが、最もはでな行為で暴れまわったようだ。

注10 ガイアナの首都ジョージタウンにある登録所で結婚証書（marriage certificate）の記録などを調べたところ、登録年月日、当事者2人の氏名、生年月日と出身地、国名（国籍）、出生切符番号（契約移民として来た時の番号）、当国へ上陸した船名と上陸年、居住地、結婚予告（banns）の場所の有無、結婚年月日とその場所、結婚認可者〔（ヒンドゥ教徒の場合、パンディット（pandit/pundit, 「司祭」ないし学識者）、イスラム教徒の場合、イマーム（imam, 導師）〕の氏名、そして移民代理人の署名が記載されている。

注11 これについても別稿で扱うつもりである。